

第1回

Pan-Report™

1998.9.21号

SP波動法とは

今回から「SP波動法」について、気が向くままにシリーズで書かせていただきます。この方法は、日足終値とその折れ線グラフを使う方法で、林輝太郎投資研究所の研究部会報に、アノーマリーの検討結果を書かせていただいている間に考えついた方法です。興味のある人は、この「Pan-Report」に書く解説だけでなく、上記の会報の解説や同友館発行の「滝沢：パソコン投資成功法」も参考にしてください。

Pan-Reportの発行は不定期ですが、2週間に1回程度を予定しているそうです。発行頻度が高いので、読者からのご要望があれば、Pan Rollingの発行方針や私の売買に支障が起こらない範囲で、ご要望に合わせ、いろいろな統計資料を紹介させていただくつもりです。また可能なら、VisualBasicで書きたいいろいろなソフトも、パン・ローリングのホームページからダウンロードできるようにもしたいと思っています。なんせ、毎日が日曜日の隠居生活をおくっていますので。

株価は、いろいろな理由で上げ下げします。しかし、しばしばオーバーシュートし、上げ過ぎたり下げ過ぎたりの過剰反応を示します。過剰反応は、もっともらしい説明ができないアノーマリーの一種です。いわば理性が働かない、感情的でしかも瞬間的な群衆心理的反応と思われます。

人間は、反省する知的動物です。感情的になってとった行動の多くは、感情が治まると後悔し、すぐに修正したくなるものです。「し過ぎた」過剰反応は、比較的短時日のうちに、少々ですが、反転することが多いようです。SP波動法は、この性質を利用する売買法です。そのため、大きく狙わない短期売買法ということになります。

過剰反応を利用するには、まずは「過剰反応」の定義が必要です。しかも私のように相場カンの悪い人間には、主観的な定義でなく、客観的な定義が必要です。しかし、株価の動きは複雑ですし、銘柄ごとの動きも違います。そこで過去のデータを利用して統計をとり、「歴史は繰り返す」という諺を信じ、統計的経験的確率で定義することを考えました。

「反応」の強さを測るには、「尺度」が必要です。尺度にもいろいろありますが、株価の動きですから、まずは値動きを考えねばなりません。しかし、株価水準が違うたくさんの銘柄を一緒にして統計をとる場合、株価そのものの動きでは、株価水準によって重さが違います。たとえば同じ10円の動きでも、株価が100円程度の銘柄と10,000円程度の銘柄では、重みがまるで違います。値動きは、どこかの時点の株価を基準にし、その株価に対する比率で扱うほうが良さ

そうです。

株式売買法の解説書が、たくさん出版されています。これらを読むと、どの解説書にも、必ず値動きの天井と底の話が出てきます。天井や底が分かるなら、基準にする時点として、天底（天井と底）を選ぶのが良さそうです。天井からどの程度株価が下がったら「下げ過剰反応」とみなすべきか、底からどの程度上がったなら「上げ過剰反応」と見なすべきか、検討すればよいからです。しかし残念ながら、どの解説書を見ても、天底の定義は主観的で、よほどの上級者かその本の著者でない限り、正確に天底を掴めそうもありません。天底を基準点にするには、どうしても客観的な天底の定義が必要です。

いっぽう、多くの投資家は、「買い」で仕掛け、「売り」で手仕舞います。しかし投資効率を考えれば、「買い」で取り、「売り（空売り）」でも取るほうがベターといわれます。取るチャンスが倍増するからです。「ドテン」がその典型です。過剰反応には、下げと上げの両方があります。できれば、この両方を同じような方法で検討したくなります。ところがここで、ひとつの大きな問題がでてきます。

200円と100円の関係を考えてみます。200円の株価が100円に下がったら、比率で表現すれば、50%の損です。100円の株価が200円に上がったら、100%の得です。同じ200円と100円の関係ですが、比率で表現すると、2倍の開きが出てきます。外割り計算と内割り計算の違いです。これでは、下げと上げの過剰反応を同じような方法で検討することができません。ところがここで、便利な考え方があり

ます。

異銘柄間のサヤ取り（裁定取引）の場合、スプレッド（spread）比率というものを使うことがあります。銘柄Aの株価をa、銘柄Bの株価をbとすれば、サヤは $a - b$ になります。このサヤを、両銘柄の株価の平均で割った比率（百分率）がスプレッド比率（SP）で、次式で表されます。

$$\begin{aligned} SP &= 100\% \times (a - b) \div \{(a + b) \div 2\} \\ &= 200\% \times (a - b) \div (a + b) \end{aligned}$$

スプレッド比率の特徴は、ふたつの株価の平均値に対する比率という考え方です。これこれ！というわけです。

上式を変形してみます。

$$a = b \times (200 + SP) \div (200 - SP)$$

$$\text{または、} \quad b = a \times (200 - SP) \div (200 + SP)$$

いま、株価の値動きの隣り合う天井の株価をa、底の株価をbとし、SPを一定の値としてみます。ある株価aが天井だとすると、次に来る底値bとの間に次の不等式が成立しなければなりません。

$$a \geq b \times (200 + SP) \div (200 - SP)$$

また、ある株価bが底だとすると、次に来る天井値aとの間に次

の不等式が成立しなければなりません。

$$b \leq a \times (200 - SP) / (200 + SP)$$

上の2式におけるSPを一定の値とすれば、この値によって決まる値動きの波の天底を一意的に、つまり客観的に、誰がやっても必ず同じに決めることができることになります。

このSP（百分率）を「SP波動率」、これを利用する売買法を「SP波動法」と呼ぶことにした次第です。

なおSPで決まる天底は、上記の不等式で定義するため、ある大きさ以上の波の天底になります。